

梅崎春生「凡人凡語」における二つのモチーフ

― 遺作「幻化」への導入として ―

高 木 伸 幸

はじめに

昭和三十七年六月『新潮』に掲載された梅崎春生の短編「凡人凡語」は、発表直後から今日まで、庶民の「日常」を描いた、梅崎文学における、いわゆる「市井もの」として論じられてきた^①。例えば近年では、菅野昭正がこの小説について、「ある庶民的な界限の日々の生活がどんなふうの流れているか、その様相をたいへん分りやすく浮かびあがらせてくれる」と指摘し、かつ「日常性のなかにも苛烈な障害がある」ことを主張していると論じた^②。

「凡人凡語」は、一人暮らしの画家「ぼく」を語り手として、タバコ店の主人森甚五およびその息子平和^{ひらかず}、そして赤木医院の院長赤木医師など、「町内の人々」と「ぼく」との関わりを描いている。なるほど表面上は、庶民の「日常」を描いた「市井もの」と言う雰囲気があり、これら先行評は、大まかな方向において適切と言えよう。

しかし、これらは主に文芸時評や文庫解説で、「凡人凡語」を正面から取り上げた論考とさええず、考察の具体性には欠いている。例えば菅野論においても、「日常性」の中でどのような「苛烈な障害」が、なぜ生ずるのか、詳しい解説は為されていない。「凡人凡語」には、より踏み込んだ考察が必要と言える。結論を少し記すと、「凡人凡語」は、庶民の「日常」を描きつつ、その中に戦後社会の「平和」を象徴させている。一見「平和」な戦後社会において、そこに生きる人々の人間関係が、さらには精神世界が、実際はどのようなかを追求しているのである。そして、それらのモチーフを表すことにおいて、「凡人凡語」は梅崎文学の中でも重要な位置を占める一作と言える。以下に考察を進めたい。

―― (1) ―

向うから犯されることなく、こちらからも邪魔することなく、

一方交通的に、そこはかとなくつながっている。そんな人間関係を、人間同士の乾いたつながりを、ぼくは嘉しとするんですかねえ。(中略)だからぼくは日頃から、自分に言い聞かせている。自分から動くな。働きかけるな。身を乗り出すな。これが三十年かかってぼくが身につけた、趣味と言いますか、処世法と言うか、まあそう言ったものですね。

語り手「ぼく」の生活信条である。実際、「ぼく」は、その通りに生活している。しかし、森タバコ店の息子、森平ひら和わから嫌われ、憎まれているらしい。「ぼく」が「母屋で飼っている犬を連れて散歩に出かけ、中学校の傍を歩いてい」た際、「野球のボールが飛んで来」て「バク(犬の名)の鼻柱に命中した」。ボールを投げたのは「この中学校の生徒」でもあった森平和。「それ球にしては勢いが強過ぎ」で、「ぼくに当てるつもりでコントロールが狂って、バクに命中してしまった」。「ぼく」は、そのように「仮説」を立てたのである。

この「ぼく」の「仮説」が正しいかどうか、不明である。しかし、基本的には、それを正しいものと受け取ってよかろう。「ぼく」が右の「仮説」を立てる以前、以下のような経緯が描かれているからである。

平和の父であり、タバコ店主の森甚五。彼は妻フクが「浮気でもしてるかと、疑って」おり、別の理由から、森タバコ店の常連の一人、

大久保を「引っか」くという事件も起こした⁽³⁾。フクも「放っては置け」ず、甚五は精神病院の大部屋へ「公費患者」として入院させられる。ところが甚五は、入院後間もなく、病院を抜け出し、森タバコ店へ戻ってくると、妻へ「男はどこに隠した?」「男を出せ!」と怒鳴りつけ、さらには妻が隠した「男」として、「ぼく」の名前を「大声でわめいて」「ひとあばれした」。甚五は、フクの浮気相手として「ぼく」を捉えているのであるが、これはもちろん、甚五の「妄想」に過ぎない。「ぼく」の「身に覚えはな」く、フクも「あんな蟹みたいな男と浮気するほど、あたしは落ちぶれてやしないよ」と甚五へ言い返している。

にも拘わらず「ぼく」が甚五の「嫉妬妄想」の対象とされたのは、「ぼく」も森タバコ店の常連の一人であったことに直接の原因を求められよう。森タバコ店は、ヤミ商売として、「おでん」「二級酒」を販売しており、大久保や「ぼく」はそれをしばしば利用していたのである。さらに注意すべきなのは、その常連である「ぼく」の姿を、平和が「タバコ売場の方」で「勉強し」ながら確実に目にしてきたことであり、父・甚五が病院から抜け出して来て、わめき、暴れた際にも、やはり平和は「石のように顔を硬直させて」その場に居合わせていたことである。「ぼく」は、ただ常連客であったという、そのことだけで、甚五から妻との浮気を「妄想」された。さらには、その甚五の姿を見た息子・平和から、母との浮気相手であり、父を

「精神病院に追い込んだ元凶だ」と思い込まれ、憎まれるに至った。そのように解釈できよう。

右のごとく「ぼく」は、不本意にもトラブルに巻き込まれており、その点に注目することで、「凡人凡語」は、菅野昭正が指摘するごとく、「日常性」の中に「苛烈な障害」を描いた小説だと、なるほど言えなくはない。

しかし、こういった分析では、この小説の表面を捉えたに過ぎまい。なぜ「ぼく」は常連客であっただけで、甚五から「嫉妬妄想」されねばならないのか。それも同じ常連客の大久保でなく、「ぼく」である理由はどこにあるのか。さらに言えば、「ぼく」はなぜ「町内の人々」に対して、自分から「働きかけ」ようとしなのか。そこまで踏み込んで考える必要がある。これらについて考察することで、「凡人凡語」の一つのモチーフが、より深いところから見えてこよう。

一 (2)

例えば「ぼく」は、町内の惣菜屋や八百屋へ買い物に行った際、店の人たちが「菜っ葉や肉を押しつけがましくおまけて呉れたりする」ことについて、「先ずはオセツカイと言うべきでしょう」と考えている。

また甚五の入院に当たって、大久保は「せつせと骨を折り、公費

患者の手続きを取ってやったりした」。そのことについて、「ぼく」は、「大久保が」役所勤めなのでその方面の伝手が多いのでしょう」と推測しつつも、次のようにコメントしている。

しかしいくら伝手があると言っても、身内でもない赤の他人の世話を焼くなんて、その情熱は一体どこから来るのでしょうか。人に親切にするのは悪いことじゃないが、それにかかりきるといふことは、生き方として間違っているような気がします。「ぼく」は他人から必要以上に親切にされることが好まない上に、人が誰かに、やはり必要以上に親切にしたり、世話を焼いたりするのを見るのも好まない人物と言える。「ぼく」は「人間同士の乾いたつながり」を「嘉しとする」とも語っているように、人と人が、べたべた結びつくこと、いわば「濃密なつながり」によって関わり合うことに嫌悪感を抱いているのである。

甚五の妻フクへ、大久保が、甚五の神経科受診を勧める場面を目を向けると、その場に居合わせた「ぼく」は、大久保の言動に対して、やはり「余計なお世話」だと思っている。加えて大久保やフクを含めた「町内の人々」の人間関係について、「ここらは向う三軒両隣の人情でつながっている」との感想を抱く。この「ぼく」の感想に含まれた、「向う三軒両隣」は、一見、如何にも庶民的な言葉で、これまでこの小説に庶民の「日常」が描かれているという指摘が繰り返されてきた一因であろう。しかし、戦時中、この「向う三軒両

隣」こそ、いわゆる「隣組」の別名⁴であった。

「隣組」とは、「国家総動員法（一九三八年法律第五五号）のもとで、住民をその生活の末端において捕捉・管理するとともに、戦争への『住民参加』の意識と儀式と形式を確立するための『装置』として、国家により目的意識的に創出された」。例えば同じ時期、「東京市の『町会整備運動』でも、一丁目ごとに一町会を作るとともに、『向こう三軒両隣』で隣組をつくることに重点が置かれた」⁵。水島朝穂は「住民管理の細胞『隣組』（『防空法制下の庶民生活』③④、平成八年三月・六月『三省堂ぶっくれっと』118・119号）の中で、次のように書いている。

隣組は、地域の隅々まで、無数の細胞のように伝播し、上から命令を下さなくても、「自発的」に互いを牽制・監視しあう仕組みを完成させていった。（中略）家族の悩みから「今日の夕飯」まですべてを知り合う関係とは「おせっかいの制度化」にとどまらない。「向こう三軒両隣」という最も近接した関係が、相互の親密な「助け合い」を生み出すのと裏腹に、「異質なものを素早くキャッチする感知器の役割を果たしたわけである。

こうした「隣組」は、昭和二十二年五月、ポツダム政令第十五条による「町内会」禁止とともに消滅した。しかし「町内会」自体は、「防犯協会」「防火協会」と言った名目で事実上存続し、二十七年十月、対日講和条約発効に伴うポツダム政令失効により、公的な復活

を遂げた⁶。梅崎春生はその直後に発表したエッセイ「蟻と蟻地獄」（昭和二十八年七月『新潮』）の中で、「昨年（昭和二十七年）だから私の住んでいる町に、防火防犯協会というのが出来て、私の知らない間に私の家もそれに加入していた」が、しかし「協会なるものの正体」は「旧隣組復活の第一歩」だと「はっきり知れているので、その『防火防犯協会』を『脱会』したと記し、またその協会の『組長』は『隣組組長のタイプ』で、彼ら『組長族の表情』は『感覚的に嫌い』だとも書いている。梅崎春生が「戦時中の隣組」を嫌悪し、その復活を警戒していたことは、このエッセイから明らかと言えよう。

「凡人凡語」における「向う三軒両隣の人情」を、そのまま「戦時中の隣組」と同列に捉えることはできない。しかし、小説発表時と同じ昭和三十年代半ば、つまり終戦から十七年目とおぼしき時代背景⁷の中、〈濃密なつながり〉を持って描かれる、この「町内の人々」の関係には、「戦時中の隣組」から受け継がれている要素が少なからず確認できる。例えば「町内の人々」が「オセッカイ」の上に「噂」好さらにしく、特に大久保の場合は「詮索好き」であるところなど、「隣組」における「自発的」な相互牽制・監視、「おせっかいの制度化」を、彼らが自覚せずとも無意識のまま継承していると言えよう。

しかも「ぼく」は、森平和について、「終戦後に生れたのに違いありません。何が何でも勝ち抜くぞの時代に、自分の子供に平和なんて名がつけられる筈はないですからねえ」と語っている。「こん

な世代が大きくなると、案外この町の両隣の性格も消滅してしまうかも知れませんが」とも述べている。

平和は、その名前に明らかなように、戦後生まれであり、「平和」な日本社会を背景とした人物と言えよう。例えば平和が、友達の亀田君と「ちっ、けっ、たっ！」とのかけ声でじゃんけんする場面などは、如何にも「平和」な世の中を表す趣が強い。この小説に描かれている庶民の「日常」は、実は戦後社会の「平和」を象徴していることが、この平和の存在から読み取れるのである。もっとも「ぼく」にとって平和は、自分のことを憎み、嫌っているであろう相手でもあるから、「ぼく」の視点によるこの小説の中で、平和は決して好意的に描かれてはいない。しかし、そのような「ぼく」の感情にも拘わらず、ここでは、平和のごとき戦後生まれが、「この町の両隣の性格」を「消滅」させる世代として描かれていることに注目したい。つまり「向う三軒両隣の人情」は、「平和」な戦後社会の中で、これから失われていくべきことが期待され、やはり「隣組」に通ずる戦前的な人間関係として表されているのである。

「ぼく」は「三十七歳」であり、終戦時は二十歳であった計算になる。当然、「戦時中の隣組」について、身をもって体験した世代である。その「ぼく」が「町内の人々」の、その〈濃密なつながり〉に嫌悪感を抱いているのは、彼らの関係の中に、「戦時中の隣組」のごとき気配を感じ取っているからに違いあるまい。特に「ぼく」は、「町

内の人々」から話しかけられても、「原則として返事」をせず、「(返事)すれば事がけばだつ」と考えている。必要以上の会話を略すること、「隣組」的な人間関係の中でありがちな、「牽制・監視」「詮索」を避けたいが故であろう。だからこそ「ぼく」は、「町内の人々」に対して、自分から「働きかけ」ず、いわば一歩身を引いて、距離を取りながら接しているのである。

しかし「ぼく」は、そのような態度を取るが故に、「町内の人々」の中では、「変人ということになっているらしい」。「隣組」のごとき濃密な人間関係の中では、そこに深く入らず、積極的な関わりを持たずとしない人物は、周囲から「異質なもの」として、差別的視線を向けられてしまうことに注意されたい。

このことと関連して、「ぼく」と大久保の間で交わしたやり取りに目を向けてみよう。大久保は先に触れたごとく、甚五の入院について世話を焼くなど、森夫妻の間に「ずいぶん立ち入っていた」。その大久保でなく、特に「何もしていない」「ぼく」が甚五の「嫉妬妄想」の対象とされてしまった。「ぼく」は大久保へ、「どうして君が疑われず、ぼくが疑われるんだろう」と質問するも、大久保は「ぼく」へ、「何もしていないから、疑われるんじゃないかよ」と返しているのである。

この大久保の返答は、「どんな意味か判らない」と「ぼく」も答えているように、何を言わんとしているか、いま一つ捉えにくい。

あくまで皮肉を込めたユーモアに留まるかとも思える。しかし、より深く踏み込んで捉えれば、人間関係の中で、特に「隣組」のごときへ濃密なつながりの中で、どのような人物が妄想、疑いの対象とされ、さらには憎しみや嫌悪を受けていくのか、一つの示唆を与えているとも言い得る。

人間関係の中で、へ濃密なつながりを持ち、互いのことをよく知り合った他者と、常に距離を取って、「乾いたつながり」しか持たない他者とは、何か事が起こった時、疑いの目を向けやすいのは、後者と言えよう。互いによく知る関係でも、常時疑わしい行動をしている人物であれば、話しは別であるが、そうでない限り、日ごろ深く接している相手に対して、疑いの気持を持つことには申し訳なきが伴う。対して距離感のある他者であれば、申し訳なく思う必要はなく、相手のことをよく知らない分、疑いの念も「妄想」のごとく膨らみややすい。まして「隣組」のごとき関係の中であれば、そこに深く入らず、距離を取り続ける人間は、「異質なもの」と見做されるのであるから、疑いの目を向けられるのも自然な成り行きと言えよう。

ともに森タバコ店の常連客でありながら、大久保は森夫妻とへ濃密なつながりを持つていたのに対し、「ぼく」は距離を取りながら接していた。だからこそ甚五は、大久保でなく、「ぼく」へ「嫉妬妄想」を向けたのである。加えて、「町内の人々」の中に、深く

入ろうとしない故に、「ぼく」は「変人」と見做されていたことも、甚五の「妄想」をより大きく膨らませた原因と言えよう。さらに、そのような形で膨らんだ父・甚五の「嫉妬妄想」を間近で目にしたことで、平和は「ぼく」に対する憎しみ、嫌悪を抱くに至った。だとすれば、「ぼく」が平和からボールを投げつけられるという、危うい目に遭わなければならなかったのも、間接的な意味において、「乾いたつながり」を嘉しとする、「ぼく」の生活信条が、逆に災いした結果と捉えられるのである。よって「日常」に潜んだ「苛烈な障害」というよりも、それを招いたへ他者とのつながりの問題こそ、「凡人凡語」から読み取るべき主要モチーフと言えよう。

昭和二十六年十月、朝日新聞社が実施した全国世論調査を見ると、「町内会や隣組、部落会は現在、つくってはいけな」と禁止されていますが、最近この禁止を解こうという意見が出ています。あなたはこの意見に賛成ですか、反対ですか」との質問に対して、「賛成六五%、反対一八%、わからない一七%」という回答結果が出ている。賛成理由としては、「部落の協調がはかれるから、復活させるべき」「遠くの親類より近くの他人」「近所の人と相談できる」などが見られた。過半数を大きく上回る賛成であり、これら賛成理由を見ても、戦後社会の中で、日本人の多くは、「隣組」的なへ濃密なつながりを決して否定しておらず、むしろ肯定派が優勢であったことが確認できる。そのためもあってか、この世論調査の一年後、「町内会」

が公的に復活したのは、先に触れた通りである。しかも昭和三十年代に入ると、東京都では区内の町内会を束ねた「連合町会」が、多くの区で作られるようにさえた。梅崎には戦後日本人の大半を占めていたそのような考え、人間関係のあり方が、戦前に通ずるものとして、好ましからず思えたに違いあるまい。

すなわち終戦から十七年を経て、如何にも「平和」な日本社会であるが、「町内の人々」つまり共同体内には、未だ「戦時中の隣組」のごとき濃密な関係が残されている。その中で、他者と適切なつながりを持つことの難しさ、乾いた人間関係を構築する困難さが、一つの主要モチーフとして、この小説には表されているのである。

二 (1)

次に「凡人凡語」について、その主要登場人物に注目し、特に彼らの精神状態を少し詳しく分析してみたい。彼らの精神状態には、ある共通した傾向が表されている。この小説のいま一つの側面、もう一つのモチーフが、そこから見えてくるのである。

何より注目すべきは森甚五。既に触れたごとく、甚五は、精神病院に入院している。甚五は「戦後のタバコ不足の時代」に「大いに威張って」販売していたばかりに、「タバコがたくさん出廻るようになる」と、周囲から「白い眼で見られる」ようになった。そこで甚五はやむなく、タバコ売場は妻に任せ、「自分は外廻りの仕事を

始め」た。以来、外を歩く彼の姿は「うつむき勝ち」で、「暗い影を引きずっているよう」であった。おそらく、その頃から精神を病み始めていたのであろう。赤木医師によれば、甚五には「アル中の気もあるようだし、鬱状態が歴然とあらわれている」とのこと。そこに「嫉妬妄想」が加わる。「ぼく」は甚五について、「元来が小心で意志の弱い男なのです。それに更年期という条件が加わり、やり切れないさを酒でごまかしている中に、ついにアルコールの捕虜になってしまったのでしょ」と語っている。〈アルコール精神病性障害〉や、〈更年期うつ病〉には、「妄想」の傾向が見られる¹⁰⁾とのことで、甚五の「嫉妬妄想」も、そのような症状と言えそうである。このような「鬱状態」は、実は森甚五だけに限ったことではない。この小説を詳しく分析していくと、「ぼく」や赤木医師においても、そうした症状を持ち合わせているのが見えてくるのである。

例えば赤木医師の場合、「一年に一度ぐらい、変にな」って、精神病院である「M病院」に入院している。一方、「ぼく」においては、その赤木医師から「関心」を寄せられ、「病氣」だと決めつけられている。「鬱屈しちゃいかん」「甚五みたいになるよ」と叱責もされている。しかも物語の結末近くには、この二人の「病氣」について、次のごとく記されているのである。

―春の今頃の時節の、日曜日の昼下りというのは、へんにむしむしして、気分が鬱するものですねえ。赤木医師も毎年今頃

の気候が、一番体や頭に悪いと、いつか問わず語りに話していました。その赤木老先生もこの二週間ばかりさっぱりここに姿をあらわしません。おそらく彼もむしむしとしているのでしよう。

「気分が鬱する」との語句により、「病氣」と言われる「ぼく」が「鬱状態」らしく、「一年に一度」入院する赤木医師も、ほぼ同じ状態であろうことが匂わされている。ちなみに梅崎春生は短編「空の下」（昭和二十六年八月『新潮』）において、「ふだんは無口なごくおとなしい」「飛松トリさん」が、「毎年今ごろの時節、すなわち「春」の「若葉どき」になると、「所業も少々正常でなくな」り、「だってムシムシするんだよ」と言いながら、古畳や長火鉢を燃やしてしまう様子を描いている。この「飛松トリさん」の場合、「鬱」ではないうのだが、梅崎文学において、「春」の「むしむし」は、精神に異常を来す気候であることは確実と言えよう。

「ぼく」と赤木医師の場合、右の一節より、「鬱状態」の中でも、毎年特定の季節になると発病する「季節性うつ病」と捉えられる。季節性うつ病は、「日照時間が短くなる」「秋から冬にかけて」発病する患者が大多数であるものの、「春や梅雨時に、決まっとうつ病態が見られるケースもある」¹¹。二人はこの後者に当てはまるものと言えよう。

彼ら二人が「鬱状態」にある詳しい理由は記されていない。あえ

て言えば、赤木医師の場合、彼の狷介な態度もあって、医院に来る「患者の数もごくすくない」とあり、その影響があるのかもしれない。「ぼく」の場合は、後に改めて検討するが、決して自分からは「働きかけ」ない、その生活信条から生じた可能性をひとまず指摘しておきたい。

このように森甚五に、赤木医師と「ぼく」を加えた、「凡人凡語」の主要登場人物三名は、程度の強弱があるものの、いずれも「鬱」の症状を露わにしているのである。

ここで「ぼく」と森平和の関係について、改めて目を向けてみたい。「ぼく」は、森平和の投げたボールがバクの鼻柱に命中した直後、例の「仮説」をその場で思い描きつつも、その「仮説」を表に出すことは踏みとどまった。「もしその仮説にしたがってわけけば、ぼくも甚五並みということになる」からであった。「ぼく」は、自分の考えが、他人から「妄想」と捉えられるのを恐れている。実際、「ぼく」の「仮説」が本場に正しいのか、真相は不明である。万一、それが間違っていたとすれば、「妄想」とまで言えなくとも、その入口にある心理状態とも言い得る。

対して森平和に目を向けると、「ぼく」の「仮説」が「妄想」でなく、正しかった場合、今度は平和が「妄想」の入り口に立っていることになる。それと言うのも、平和が「ぼく」を憎み、嫌っている理由、つまり父・甚五の精神病院入院の元凶を「ぼく」に求めるその考えが、結局は平和の思い込みに過ぎないからである。

従って「凡人凡語」には、森甚五ら三名の「鬱状態」と併せて、やはり甚五を中心に据えながら、そこに「ぼく」または平和が必ず加わる形で、大小それぞれの「妄想」を抱いた人物関係が認められるのである。

梅崎春生はエッセイ「憂鬱な青春」（昭和三十四年十二月『群像』）の中で、「学生生活を振り返ると、いつも私にはじめじめした感じがつきまとう。青春期にあり勝ちな憂鬱症、それがずっと私には続いてきたような気がする」と記していた。特に東京帝国大学在学中については、次のように書いている。

それにあの鬱状態が、私には周期的にやって来た。鬱状態の時には、被害妄想も伴った。下宿の廊下の曲り角に女中たちがあつまって、私の悪口を言っている。下宿人たちも私の悪口を言っている。夜中に私は女中を呼んで、そんなにおればかりをいじめないで呉れと、涙ながらに頼んだこともある。またその妄想で腹を立て、下宿の雇い婆さんを殴って怪我をさせ、四泊五日の留置場入りをしたこともあった。

精神科医の廣瀬勝世は、学生時代の梅崎春生について、「かなり長い『うつ状態』にあったものと推定」し、特に右の「妄想」においては、「うつ状態から逃避又は脱出しようとして、酩酊に身をゆだねた結果の酒精幻覚症によるものであろう」と分析している。

さらに梅崎春生は、「桜島」（昭和二十一年九月『素直』）による

文壇デビューからおよそ十二年目、つまり昭和三十三年秋頃から身の不調を訴え、「凡人凡語」発表の約三年前にあたる三十四年五月二十一日から七月十日にかけて、近喰病院神経科病室に入院し、「持続睡眠療法」を受けている¹³。先に名前を挙げた廣瀬勝世がこの入院時の主治医であった。廣瀬勝世は梅崎の病名が「うつ状態―不安神経症状」で、「アルコール中毒」の傾向も見られたことを明らかにしている¹⁴。

要するに森甚五を初めとする「凡人凡語」の主要登場人物には、長年にわたる梅崎春生自身の精神状態が多分に反映されている。特に甚五の症状については、先に挙げた赤木医師の診断に見ることく、入院時における梅崎のそれが重ねられているのである。

「ぼく」は、入院中の甚五について、次のように想像している。

大部屋の片隅にじっと坐り込んで、毎日毎日女房のことを考えている。どこかに男がいるに違いない。その時ふっとぼくの顔が浮び上る。ワラでも掴むようにそれにすがりつき、その妄想を屈折させながら、やがて確信にまで持っていく。その努力とそれに伴う疲労の量は、たいへんなものだろうなあ。

甚五の「嫉妬妄想」が膨らむ過程を緻密に記し、またその疲労の大きさにも言及することで、真に迫った、説得力ある表現と言える。ここに直ちに梅崎春生自身の経験が表れていると捉えるのは安易に過ぎよう。しかし、たとえ自分の体験そのままを記さずとも、「妄想」

の苦しみを直接に知る梅崎だからこそ、右のごとく、リアルな描写が可能であったのは言うまでもない。

以上より、「凡人凡語」には、梅崎春生自身の精神状態、入院体験が反映され、「鬱」「妄想」という、人間の精神世界に迫った側面も認められるのである。

二 (2)

「凡人凡語」における「鬱」「妄想」について、いま少し詳しく確かめてみたい。梅崎春生は、自ら「鬱」「妄想」に苦しんできた作家であるだけに、「凡人凡語」より十年以前から、精神の病や精神病院への関心を小説の中に表していた。例えば「囚日」(昭和二十四年四月『風雪』別冊)「黄色い日日」(昭和二十四年五月『新潮』)の短編二作で、早くも主人公らが精神病院を訪問する場面を描いている。恵津夫人によれば、梅崎春生は「アル中患者のことや精神病のことなどは殊に興味をもち、医学書でくわしくしらべたり、専門医に尋ねたりしていた」¹⁵。そうである。梅崎春生自身も、エッセイ風短編「不思議な男」(昭和三十二年十月『オール読物』)の中で、根本茂男¹⁶なる嘘つき男を理解する手掛かりとして、旧知の間柄である松沢病院の廣瀬貞雄医師(廣瀬勝世の夫)を訪ね、ヘパロノイア(ヘパフレニイ)という、ともに「妄想」を症状とする精神の病について「説明して貰った」¹⁷ことを記している。

「凡人凡語」には、こういった梅崎春生がかねてから抱いていた関心に加えて、同作以前の梅崎の小説と較べると、精神の病や精神病院に対する明らかな意識の変化が見られることに注目したい。

例えば文壇デビューから約三年後に梅崎が著した「囚日」においては、「内包している」世界が「歪んで」た人間が入る場所として、「脳病院」と「刑務所」が同列に扱われている。同じく「黄色い日日」では「気違いになるよりは、刑務所へ行った方がいい」と記し、精神病院を「刑務所」以下の場所として表している。精神病院入院患者はもちろぬ、通院するだけの患者までもが、周囲から嫌悪され、差別的な視線を向けられたことは、同時代の他作家の小説からも確認できる¹⁸。梅崎もこれらの小説を著した時点において、そうした一般的な日本人の認識の範囲内であったと言わざるをえない。

対して「凡人凡語」では、例えば甚五の入院先として、赤木医師から、精神病院として有名な「M病院」を勧められた際、妻フクが「いくら何でもM病院じゃねえ。まるでほんとの気違いみたいじゃないの。見っともなくて、人にも言えないわ」とこぼす。そのフクに際して、「ぼく」は次のように考えるのである。

M病院入りがなぜ見っともないのか。病気なら仕方がないじゃないか。道念によりかかってばかりいるのは、ばかげた話だと思ふ(後略)

また赤木医師は例のごとく、年一度、「自分の変調」に気づくと「M

病院におもむぎ、入院してしまう」。そのことについて「町内の人々」は「困ったわねえ、あの先生も」などと噂している。一方、「ぼく」は、「自ら進んで入院するなんて、かえって健全な証拠じゃないでしょうか。町の連中の考え方は、どうも逆のような気がします」と語っているのである。

さらにその赤木医師が、しばしば「ぼくの画室に遊びに来る」とこ
とで、「町内の人々」から「ぼく」も赤木医師の「部類に近い」、つまり「キジルシだなど」と思われてしまう。ところが「ぼく」の感想は以下の通りである。

そう思われても、ぼくは別段痛痒は感じません。人間、誰だって、その要素はあるのですから。

このように「ぼく」は、精神病患者に差別的な視線を向ける「町内の人々」とは異なる認識を持つ。精神病を恥ずべきことでなく、決して特別でも異常でもない、誰もが抱え得る要素と捉えているのである。

もう一点、次のような本文が見られる。森甚五の入院先に関する「ぼく」の感想である。

その病院の名を、仮にQとしましょう。赤木医師の話によると、インチキ病院のひとつで、精神病院というのは経営次第によつては、なかなか儲かるものだそうですね。相手が気遣いだから、何を食わせても文句は言わないし、大部屋にござし詰

め込んで差支えない。保護者も世間体を考えて、抗議しない。結核患者だと、待遇が悪いと団結して反抗するが、気遣いには団結力がない。つまりどんな待遇をしてもいいと言わうわけです。うっかりノイローゼにもなれませぬねえ。公費患者は入院費が月額一万五千円、葉代が三千円で、合計一万八千円になります。大部屋に押し込み、粗悪なものを食わせて、それで一万八千円とは、経営者は笑いがとまらないでしょう。可哀そうに甚五はとうとうその一万八千円組の一人となりました。

今日から見れば、「気遣い」など不適切な表現であるが、当時としてはやむを得ず、梅崎春生に差別的な意図があったのではない。むしろ入院費用や院内での処遇等について、皮肉を込めながらも患者の立ち場を理解し、批判的な説明が為されていると言わべきである。「凡人凡語」が発表された昭和三十年代、「一部の病院では、患者をとりこめておけばよいと、2倍ちかくつめこんで、利益だけ追求している」現実が確かに存在した。¹⁹⁾

実は梅崎春生が「凡人凡語」を著すにあたって、その背景には、以下のような、戦後日本の社会状況が存していた。昭和二十五年五月一日に「精神衛生法」が施行されて以来、「凡人凡語」が発表される昭和三十七年に至るまで、全国各地で精神病院が急激に増加しつつあったことである。²⁰⁾ 全国に設置された単科精神病院数を挙げれば、昭和二十六年には148であった。それが三十年には260、三十五

年には506まで伸びているのである。

かくのごとき精神病院のいわば乱立から当時、多くの日本人は、精神病院および精神病患者に対して、差別的な意識を依然として残しつつも、それらが決して縁遠い存在ではないことを思い知らされたと言えよう。実際、昭和三十年代の文学界においても、島尾敏雄の短編集『死の棘』（昭和三十五年十月、講談社）や安岡章太郎「海辺の光景」（昭和三十四年十一月『群像』）など、各作家の代表作と言い得る作品の中に、精神病院、精神の病を取り上げた小説が目につく。²¹梅崎春生も予てから抱いていた精神の病への関心を、より一層高めさせられたに違いない。しかも梅崎には「凡人凡語」の執筆を前にして、自身の神経科病室への入院が加わった。梅崎が入院したのは開放病棟であったものの、彼の中で精神病院内部を特別な空間と捉える認識が変化し、いわゆる精神病患者へ歩み寄り、寄り添うごとき意識が生まれたと見てよい。「凡人凡語」においては、精神病院・精神病患者への差別的な意識が消え、それどころか、精神病院内部の腐敗を批判する姿勢さえ見られるのは、そのためである。梅崎春生にとって、精神の病と精神病院は、自身の問題であり、同時に極めて身近で現代的な社会問題に思えたのである。

すなわち「凡人凡語」には、作家自身の精神状態が、そのまま戦後社会の問題として反映され、いま一つのモチーフとして表されている。「鬱」と「妄想」が、誰にも起こり得る、身近で同時代的な

病として提示されているのである。

おわりに

以上のごとく、「凡人凡語」は、一見「平和」な戦後社会においても、実は戦時中のごとき人間関係が残存する故、他者と適切なつながりを持つことの難しさを表している。加えて、同じ戦後社会の中、「鬱」と「妄想」を身近で同時代的な病として表現している。これら二つのモチーフは、ともに戦後社会が舞台であるものの、右の考察で触れられなかったように、その結びつきは必ずしも明確でない。それぞれが、別々に、独立した形で提出されている趣もある。

しかし二つのモチーフどちらも、一見「平和」な戦後社会における生き難さの追求と言い得る。また作中にはっきり認められずとも、「ぼく」については、それら二つが以下のごとく連動していると推察されよう。「ぼく」は戦後社会の中で、適切なつながりが見出せない故に他者と距離を取り、引き籠りにも似た生活を続け、「鬱状態」を招いていく。さらに「鬱」であることから、「ぼく」と他者との距離はますます開いていく。そのように考察できるのである。いわば戦後社会における人間関係構築の難しさによって生ぜしめられた「鬱状態」である。また「凡人凡語」において、甚五はタバコ店の客と、赤木医師は医院の患者と、ともに良好な関係を築けておらず、彼ら二人の「鬱状態」についても、「ぼく」と同じでないものの、やはりへ他

者とのつながり)のあり方に触れている。

「凡人凡語」からおよそ三年後、梅崎春生は長編「幻化」(昭和四十年六、八月『新潮』)を発表、直後に肝硬変にて逝去した。その遺作小説「幻化」の主人公五郎は戦時中、海軍の仲間たちに対して、「同行者としての連帯感」を抱いていた。だが終戦後、歳月を経ていく中で、この「同行者としての連帯感」、つまり戦時下での他者とのつながり、人間関係が「だんだん信じられなくなってきた。酒を飲んでも、勝負ごとにもだめだった」。「他の人とか関係があると思ひ込む。そこから誤解が始まる」とも思っている。やがて「悲しいような憂鬱な感じ」「漠然とした不安感」に襲われ、「精神科病室」に入って治療を受けた。しかし五郎は「二十年前には確かにあったもの」「つながりを確かめたい」と考え、病院を抜け出し九州へと向かい、兵隊生活や学生時代の思い出の地を巡り歩く。右のごとく「幻化」には、海軍仲間との連帯感に対する疑念という形で、「凡人凡語」から連なるモチーフが認められる。「隣組」のごとき人間関係への批判を幾分変形させながら、同じ戦時中に関わる(他者とのつながり)が問われているのである。しかも、その(へつながり)への疑念から生じた主人公の「鬱状態」も、そこには描かれている。つまり「凡人凡語」における二つのモチーフが、ともに「幻化」へと継承され、それらは密接に関わり合いながら表されているのである。「凡人凡語」以来、作者の中では結びつき、連動してい

た二つのモチーフが、ここに来て、より明確化されたと言えよう。「幻化」の物語は、五郎が入院先の「精神科病室」を抜け出すところから始まっているが、「凡人凡語」の「ぼく」は、この五郎の入院以前の姿を描いていると見ることもできる。

かくて「凡人凡語」は、(他者とのつながり)および人間の精神世界を表しつつ、戦後社会の生き難さを追求することで、遺作「幻化」への導入と言うべき役割も果たしており、梅崎文学の中でも重要な位置を占める一作と見做せるのである。

【注】

- (1) 例えば平野謙は「今月の小説(下)」(昭和三十七年六月二日『毎日新聞(夕刊)』)の中で、「凡人凡語」を「日常生活のニュアンスに即し」た小説として取り上げた。また和田勉は『梅崎春生の文学』(昭和六十一年十一月、桜楓社)第二章第六節「短編小説」の中で、「凡人凡語」について「軽妙洒落なエッセイ風リアリズム小説」と捉え、「市井もの」に分類した。
- (2) 「解説 日常の小説家」(『ポロ家の春秋』平成十二年一月、講談社文芸文庫)
- (3) 「甚五が偽証罪で誰かを訴えたのに、不起訴と判決が下った」。甚五へ送られるはずの、その通知ハガキが「間違って大久保のところ」に配達されて来た。大久保はハガキを持って森タバコ店へ行き、甚五に事件の説明を求めたところ、「甚五から引っかけたのであった。いわゆる(メーデー事件裁判)にて、検察側証人の渡辺政雄警視が「偽証罪」にて告発されたもの、昭和三十四年十二月二十三日、「不起訴」と決定した事件があった(『メーデー事件裁判闘争史』昭和五十七年十一月、白石書店)。

梅崎春生はエッセイ「被告は職業ではない」（昭和三十五年五月十五日『週刊現代』）の中で、同事件について批判的に言及している。「凡人凡語」のこのエピソードも、メーデー事件における「偽証罪・不起訴」への皮肉が含まれている。

(4) 森武麿『日本の歴史②アジア・太平洋戦争』（平成五年一月、集英社）。

(5) 水島朝穂「住民管理の細胞『隣組』」。なお梅崎春生「凡人凡語」では、「向う三軒両隣」であるが、水島朝穂「住民管理の細胞『隣組』」では、「向う三軒両隣」と表記されている。引用は、それぞれの表記に従っている。

(6) 高木鉦作「東京都・区政と町会連合会―行政補助団体の圧力団体化―」（日本政治学会編『日本の圧力団体 年報政治学一九六〇』昭和三十五年五月、岩波書店）参照。

(7) 森平和は「中学校の生徒」であり、後述するように、「終戦後に生れたのに違いありません」とある。従って、この小説は昭和三十年代半ば、おそらくは小説発表時の昭和三十七年頃の設定と思われる。

(8) 「どう思う？」隣組や町内会の解禁―本社世論調査―との見出しで、昭和二十六年十月二十八日『朝日新聞』に掲載された。

(9) 注(6)と同じ。梅崎春生が在住する練馬区では、昭和三十一年に「連合町会」が結成。三十四年三月十六日には、「東京都町会連合会」結成大会が開催されている。

(10) 岩井寛・北西憲二編著『精神医学入門 うつ病』（昭和五十七年六月、日本文化科学社）、風祭元監修、南光進一郎・張賢徳・津川律子・菅間真実編『精神医学・心理学・精神看護学辞典』（平成二十四年七月、照林社）参照。

(11) 岡田尊司著『うつと気分障害』（平成二十二年九月、幻冬舎新書）参照。

(12) 『人生 幻化二似タリ―梅崎春生のこと―』（平成七年十一月、成瀬書房）

(13) 梅崎春生のエッセイ「二塁の曲り角で」（昭和三十四年六月『新潮』）「神

経科病室にて」（昭和三十四年十月『新潮』）「私のノイローゼ闘病記」（昭和三十八年六月『主婦の友』）および「年譜」（『梅崎春生全集』第七巻、昭和四十二年十一月、新潮社）参照。

(14) 注(12)と同じ。

(15) 『幻化の人』（昭和四十二年三月『新潮』）、『幻化の人・梅崎春生』（昭和五十年八月、東邦出版社）収録

(16) 梅崎春生の長編「つむじ風」（昭和三十一年三月二十三日〜十一月十八日『東京新聞』）の主人公陣内陣太郎のモデル。「不思議な男」の他、エッセイ「ふしぎな人物―根本茂男のこと―」（昭和三十二年七月六日『東京新聞』）参照。

(17) 廣瀬勝世『人生 幻化二似タリ―梅崎春生のこと―』にも、同様のエピソードが記されている。

(18) 例えば遠藤周作の短編「松葉杖の男」（昭和三十三年五月『文学界』）では、神経科に通う加藤なる人物が登場し、その加藤の妻が主治医の背に對して、「先生、父ちゃんはもう神経科に通うのがイヤだと言いました」、「神経科に通うのは父ちゃんが気が変なためじゃないかと、陰口をきかれるもんですから」と語っている。

(19) 岡田靖雄編『精神医療―精神病はなおせる―』（昭和三十九年七月、勁草書房）

(20) 「精神衛生法」とは、掻い摘んで記せば、それまで大多数の精神病患者が座敷牢に閉じ込められ、社会から隔離されていた状況を鑑み、彼らへ正当な医療保護が為されるべく、各都道府県に精神病院設置を義務付けた法令である。実際、同法の施行により、精神病院が多数建設され、多くの精神病患者が座敷牢から病院へと移され、収容されていた。また同法も今日から見れば不十分な部分が残る中、精神病院がいわば乱立していったことで一部の精神病院に見られる腐敗を招く結果ともなった。

岡田靖雄編『精神医療―精神病はなおせる―』、矢野徹・仙波恒雄著『精神病院*その医療の現状と限界』（昭和五十二年三月、星和書店）参照。
単科精神病院データは後者に拠った。

(21) 島尾敏雄の短編集『死の棘』には主人公の妻の、安岡章太郎の「海辺の光景」には主人公の母の、ともに精神の病と精神病院入院が描かれている。どちらも作者自身の経験をモデルにした私小説風作品として知られている。前者は芸術選奨文部大臣賞を、後者は同じ芸術選奨および野間文芸賞を得た。

*梅崎春生の作品引用は、『梅崎春生全集』全七巻（昭和四十一年十月）（四十二年十一月、新潮社）に拠った。

【付記】

筆者は先に発表した「梅崎春生『幻化』―久住五郎の精神世界―」（平成二十四年十二月『近代文学試論』第五十号）において、作者と精神の病との関わりを考察している。同論には、本論と一部重複する部分もあり、併せて参照されたい。

―たかぎ・のぶゆき、別府大学教授―